



図2 南海トラフで過去に起きた大地震の震源域の時空間分布 (石橋, 2002 をもとに編集)

- ・ 白鳳(天武)地震(684年)以降の地震を示している。
- ・ 図中イタリック体で表した数字は、地震の発生間隔(年)を示す。
- ・ 震源域は地形の境界(都井岬、足摺岬、室戸岬、潮岬、大王崎、御前崎、富士川)で東西方向に区切っている。
- ・ 黒の縦棒は、南海と東海の地震が時間差(数年以内)をおいて発生したことを示す。

別表

	1944年昭和東南海地震、1946年昭和南海地震	1854年安政東海、安政南海地震	1707年宝永地震	1605年慶長地震	1498年明応東海地震
1. 空間情報					
震源域	<b>昭和東南海地震:</b> 紀伊半島東部の沖(熊野灘)から遠州灘にかけての領域 <b>昭和南海地震:</b> 紀伊半島南西部から四国の太平洋沿岸を含む領域	<b>安政東海地震:</b> 紀伊半島東部の沖(熊野灘)から駿河湾にかけての領域 <b>安政南海地震:</b> 紀伊半島沖から四国沖にかけての領域	遠州灘沖合から高知県の沖合までの広い範囲 津波の被害が大きいことから、浅部も震源域に含まれる可能性がある。 波源域は、さらに南海トラフ軸寄りも含まれる可能性がある。	足摺岬沖から御前崎沖にかけての領域 津波地震であることからトラフ軸に近い浅部が主である可能性がある。 南方の遠地津波の可能性も指摘されている。	潮岬沖から駿河湾にかけての領域 和歌山市での津波記録より、震源域は南海地域にも及ぶ可能性が高い。
2. 時間情報					
発生時期	<b>昭和東南海地震:</b> 1944年12月7日 最大余震は12月12日のM6.4 <b>昭和南海地震:</b> 1946年12月21日 最大余震は1948年4月18日のM7.0 (両地震は約2年差で発生)	<b>安政東海地震:</b> 1854年12月23日 <b>安政南海地震:</b> 1854年12月24日 (両地震は30時間差で発生)	1707年10月28日 最大余震は1707年10月29日(駿河・甲斐で発生したM6.5~7.0の地震)	1605年2月3日	1498年9月20日
3. 規模(推定値)	<b>昭和東南海地震:</b> M7.9 <b>昭和南海地震:</b> M8.0	<b>安政東海地震:</b> M8.4 <b>安政南海地震:</b> M8.4	M8.6	M7.9	M8.2~8.4
4. 被害等					
震害	<b>昭和東南海地震:</b> 静岡、愛知、岐阜、三重の各県に多くの被害が出た。死者998、住家全壊約26,000、流失約3,000など被害は沖積地、埋立地で大きかった。 <b>昭和南海地震:</b> 被害は中部地方から九州まで及んだ。死者1,330、全壊家屋約11,500、流失約1,450など。	<b>安政東海地震:</b> 震害のもっとも大きかったのは天竜川河口に至る沿岸地域。甲府、松本、福井でも被害があった。 <b>安政南海地震:</b> 紀伊半島、四国沿岸では震害と津波の被害の区別がつきにくい。 紀伊田辺領、小松島、土佐、日向、宇和島、出雲などで被害があった。	家屋倒壊地域は、駿河中央部・甲斐西部・信濃・東海道・美濃・紀伊・近江・畿内・播磨・大聖寺・富山、及び中国・四国・九州に及んだ。 東海道・伊勢湾沿岸・紀伊半島でももっとも大きかった。	記録なし。	紀伊から房総にかけての海岸と甲斐で地震動が大きく、熊野本宮の社殿が倒れ、那智の防舎も崩れた。
津波	<b>昭和東南海地震:</b> 伊豆半島から紀伊半島の間を襲った。波高は熊野灘沿岸で6~8m、伊勢湾・渥美湾内は1m内外、尾鷲で8~10m、新鹿で8.4mなど。津波の被害は三重県・和歌山県に集中した。 <b>昭和南海地震:</b> 房総半島から九州までの広い範囲を津波が襲った。被害は地震によるものより大きかった。波高は紀伊の南端の袋で6.9m、三重・徳島・高知の沿岸で4~6m。	<b>安政東海地震:</b> 房総から土佐の沿岸を襲った。伊豆下田・遠州灘・伊勢志摩。熊野灘沿岸での被害が目立った。江戸でも山谷堀の水位が1mくらい高くなった。 下田では地震後約1時間で津波が襲来し840軒が流失した。波高は9m。柿崎では6.7m、舞阪で4.9m、榛原で5.4m、甲賀で10m、鳥羽で4.5m、村方では6~9m。 <b>安政南海地震:</b> 波高は串本で15m、古座で9m、牟岐で9m、宍喰で6m等土佐領で流失3200余、推定波高5~8m、大阪湾北部で推定波高2.5m。	伊豆半島から九州に至る太平洋沿岸および大阪湾・播磨・伊予・防長を襲った。土佐で被害が最大で、流失家屋11,167、死者1,844など。	犬吠崎から九州に至る太平洋岸に押し寄せ、八丈島で谷ヶ里の家は残らず流失した。伊豆仁科郷では海岸から1.3~1.4kmまで波が達した。浜名湖近くの橋本では戸数100のうち80戸流され、死者多く、船が山際まで打ち上げられた。 伊勢では地震後数町沖まで潮が引き、約2時間後に津波が襲来した。 阿波の鞆浦では波高約30m、死者100余人。甲浦、室戸岬付近、土佐清水市の三崎等で死者多数。九州では鹿児島湾内に津波が襲来した。	津波は紀伊から房総の海岸を襲い、伊勢大湊では家屋流失1,000、溺死5,000など。西伊豆仁科郷では海岸から18~19町の内陸に達したとの記録もある。由比ヶ浜では波が大仏殿千度壇に達した。千葉湊の誕生寺が流没した。 静岡県志太郡で流死26,000(260の誤りとの説もある)、伊勢志摩で溺死10,000。
地殻変動等	<b>昭和東南海地震:</b> 紀伊半島東部の海岸は30~40cm沈降した。 <b>昭和南海地震:</b> 高知市街地等では地殻変動(沈降)による被害が発生した。室戸岬は1.3m、潮岬は0.7m、足摺岬は0.6m隆起。高知・須崎では1.2mの沈降。高知市・須崎・宿毛付近でそれぞれ9.3、3.0、3.0km <sup>2</sup> に海水が入った。室戸岬の隆起はその後徐々に回復しつつある。	<b>安政東海地震:</b> 清水から御前崎付近まで1~2m隆起、浜名湖北岸の気賀では2,800石の地が汐下となった。三河幡豆郡吉田などの村々も沈降した。 <b>安政南海地震:</b> 高知市付近は約1m沈降し浸水。上ノ加江付近で1.5m、甲ノ浦1.2m沈降、室戸岬で1.2m隆起	高知の市街地の20km <sup>2</sup> が最大2m沈降した。 室戸岬1.5m(室津1.8m)、串本1.2m、御前崎付近1~2mの隆起した。	なし	
地震の前後にあった事象		<b>安政南海地震:</b> 湯峰温泉、道後温泉、紀伊鉛山湾の温泉群が止まった。 約2か月前から小地震が発生していた。	1707年宝永地震の4年前には1703年12月31日に関東でM8.1程度の地震(元禄地震)が発生した。また、宝永地震の約1ヶ月半後の1707年12月16日に富士山が噴火した。 道後温泉は145日止まった。紀伊湯ノ峰、山地、龍神瀬戸鉛山の湯が止まった。	湯ノ峰温泉が1か月半ほど止まった。京都での余震は2か月程度まで続いた。	
その他	津波は房総半島から九州に至る沿岸を襲っており、地震より多くの被害を生じた。		海岸では地割れから泥を噴出した。 安倍川上流で大谷崩れが発生。富士川は山崩れのためふさがった。 土佐では、死者の7割が女性であった。		震度分布は宝永地震、安政東海地震に似る。震源が南海地域に及んだ可能性があるが、四国以西の資料が少なく不明である。

	1361年正平(南海)地震	1099年康和(南海)地震、1096年永長(東海)地震	887年仁和(南海)地震	684年白鳳(南海)地震
1. 空間情報				
震源域	足摺岬沖から御前崎沖にかけての領域	<b>永長東海地震:</b> 潮岬沖から御前崎沖にかけての領域 駿河湾に及ぶ可能性がある。 <b>康和南海地震:</b> 足摺岬沖から潮岬沖にかけての領域	足摺岬沖から御前崎沖にかけての領域	足摺岬沖から潮岬沖にかけての領域 御前崎沖に及ぶ可能性がある。
2. 時間情報				
発生時期	1361年8月3日	<b>永長東海地震:</b> 1096年12月17日 <b>康和南海地震:</b> 1099年2月22日 (両地震は約2年2ヶ月差で発生)	887年8月26日	684年11月29日
3. 規模(推定値)	M8 1/4~8.5	<b>永長東海地震:</b> M8.0~8.5 <b>康和南海地震:</b> M8.0~8.3	M8 1/4	M8 1/4
4. 被害等				
震害	摂津四天王寺の金堂転倒、5人圧死。山城東寺の講堂が傾いた。興福寺金堂・南円堂破損。奈良薬師寺の金堂の2階傾き、招提寺の九輪大破し廻廊など倒れた。熊野山の山路並びに山河の破損が多かった。	<b>永長東海地震:</b> 太極殿小破、東大寺の巨鐘が落ちた。薬師寺回廊転倒、東寺塔で塔など破損した。 <b>康和南海地震:</b> 興福寺の大門、回廊が転倒した。	京都で諸司官舎及び東西両京の民家の倒壊あり、圧死者多数。五畿七道諸国で官舎が多く破損した。	山崩れ、河沸き、諸国の郡官舎・百姓倉・寺塔・神社の倒壊が多く、人畜の死傷も多かった。
津波	摂津、阿波、土佐で津波の被害があった。特に、阿波の雪湊(由岐)全滅。家屋流失1,700、死者60以上。難波浦では数百町潮が干いて、約1時間後に津波が襲来した。	<b>永長東海地震:</b> 津波が伊勢、駿河を襲った。駿河で神仏舎屋・百姓の流失400余。伊勢阿之津でも津波の被害があった。 <b>康和南海地震:</b> 津波に関する記事は発見されていない。	津波が沿岸を襲い溺死者多数。特に摂津の国の浪害が最大である。	津波来襲し、土佐の運調船が多数沈没した。
地殻変動等		<b>永長東海地震:</b> 「近衛家文書」によると、木曾川下流の鹿取・野代の地が「空変海塵」の状態となった。 <b>康和南海地震:</b> 土佐で田千余町が海に沈んだ。		土佐では田畑約10km <sup>2</sup> が沈降して海となった。
地震の前後にあった事象	湯ノ峰温泉の湧出が止まった。余震が多く発生した。			伊予の温泉、紀伊の牟婁(むろ)温泉の湧出止まった。
その他		<b>康和南海地震:</b> 余震が多く発生した。	余震は1か月程度続いた。	

宇佐美(2003)を基に編集